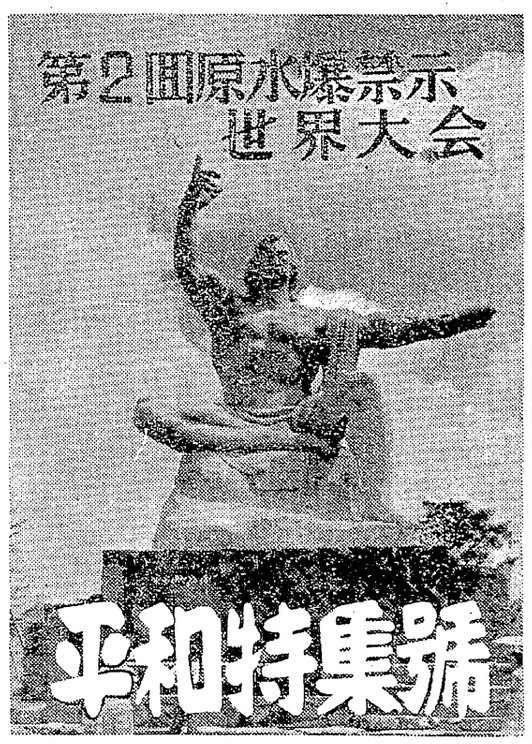


原水爆を地上から葬れ
全人類の叫び結集
長崎で世界平和大会開く

第二回原水爆禁止世界大会は、九日より三日間長崎市で開催された。わが國だけで三千三百万、全世界では七億にのぼる　原水爆を禁止せよ〃という人類の切実な願いが結集して開かれたこの大会は、世界十六ヵ國廿六名の代表と各地から集つた約三千名の人々が、原水爆をなくし明るい世界建設への道について話合つた

世界の良識集る

第一日目の本会議は九日午前八時三十分より長崎東高校体育館で開かれた。

原水爆の禁止と被爆者の救援叫ぶ世界十六カ国二十六人の代表と三千人を越える国内代表が六日の原水大会に引続いて参加した。

会場正面には平和のシンボル〃ハト〃をかたどつた地球儀が掲げられ、その下のヒナ壇に中国代表の呂迅来亡人、許広平女史をはじめソ連、フランス、ポーランド、チエコなどの各国代表、世界科学者連盟ピカール教授、世界労連ベレジン書記局員、世界平和協議会ブルーム女史、国際民主婦人連盟クーチンリエ女史ら世界大会の規模にふさわしい国際的な顔ぶれであつた。

この日、本会議は地域婦人代表山高しげり女史の開会あいさつにはじまり、議長団に外国、国内代表五十人が選出され、国際民主婦人連盟フェルトン女史と宗教代表半田孝海氏が議長団代表席についた。

次いで日本原水爆禁止協議会畑氏の紹介で七十壇の外国代表が一人々々立つて満場の拍手に応えた。

一般報告に登壇した、安井郁大会事務総長は〃被爆者の救援なくして原水爆の禁止はあり得ない〃と

原爆許すまじ!!

大会二日目の十日は午前九時から参加外国代表、国内代表約三千人が長崎市内の六分会場に分れて原水爆禁止と被爆者救援のためのテーマでそれぞれ分科会を開いた。各会場とも満員で真剣な意見の発表の中に〃三度原爆を許すまじ〃の響いを強めた。

▼第一分科会（長崎東高体育館）は「原水爆禁止と軍備縮少について」が主題。議長団には中国研究家平野義太郎氏ら四氏が選出された。世界各国で原水爆戦争の準備反対の署名運動が起り七億近い署名を獲得したから今後これを軍縮要求の方向へ持つて行かねばならぬ。そのためには原水爆禁止を含む全般的な軍縮協定の成立、日本を原水爆戦争の拠点にしない。友好親善や国際連合の強化、世界的な規模で原水爆禁止運動を発展させるための努力が必要だなどを結論この主旨を全世界に呼びかける

三度原爆許すまじ
六分科会で対策をねる

▼第二分科会（長崎東高体育館）は「原水爆禁止と被爆者救援」がテーマ。原子力研究家平野義太郎氏ら四氏が選出された。世界各国で原水爆戦争の準備反対の署名運動が起り七億近い署名を獲得したから今後これを軍縮要求の方向へ持つて行かねばならぬ。そのためには原水爆禁止を含む全般的な軍縮協定の成立、日本を原水爆戦争の拠点にしない。友好親善や国際連合の強化、世界的な規模で原水爆禁止運動を発展させるための努力が必要だなどを結論この主旨を全世界に呼びかける

▼第三分科会（長崎東高体育館）は「原子力の平和的利用」がテーマ。原子力は軍事に利用することがかに平和を妨げるかについての意見が名古屋大教授戸沢鬱彦ら議長団から出され、原子力が真に平和的に利用されるようになるためには原子兵器の禁止が不可欠の条件であり、原子力の平和利用の研究と原子兵器禁止の運動も固い結びつきが必要だと結論された。

▼第四分科会（国際文化会館）はこの大会でもつとも重要視されている「原水爆被害の実相と被爆者の救援」をテーマとし議長団は広大教授で被爆者の森滝市郎氏ら六氏。まず〃長崎における原爆被害の実相と被爆者救援の状況〃について。〃ケロイドはなおり白血病は年ごとに減つている〃と長崎大学医学部外科調来助教授の報告があつた。次いで〃救援運動の意義と方向〃と題して広島原水協事務局次長藤居平一氏が〃被害者の救援を忘れた原水爆禁止運動は成立たない〃と力説

(1)原爆被害者救護法の制定（政府への要求）(2)原水爆実験による一切の損害賠償（実験各政府へ要求）(3)原水爆被害の実情調査(4)被爆者組織の確立と検診治療の実施など各項目を満場一致打出した。

▼第五分科会（麿屋小講堂）は基地問題を含む平和運動について総評議長藤田藤太郎、松本治一郎、吉田法晴氏らが議長団となり基地や沖縄の問題、再軍備、憲法改正問題は原子戦争準備の一環をなすものであり原水爆の問題とつながりのあることを確認、これらの一つ一つを解決して行くことが国際緊張を柔らげ原水爆を禁止させる途へ通じていると意見がまとまつた。

▼第六分科会（長崎大学経済学部講堂）は「生活を護る」をテーマに開かれ原水爆の恐怖が続く中、青年、学生、学者、宗教家母親たちの禁止運動のあり方について熱心な訴えが出され原水爆禁止運動を実際にやつて行く上での困難や成功した具体例が話合われた。

原水爆の実験禁止

大会三日目は十一日午前九時より本会議場で開催、前日の各分科会の結論が報告されたあと一般代表の意見発表が熱心になされ、大会宣言を次のように決定発表した。

大会宣言

原爆が投下されてから十一年目、一九五六年八月九日から三日間日本の代表たち五千名は、国際組織六団体、七カ国の外国代表たちとともに、ナガサキに参集して原水爆を禁止するためわたしたちはどのような行動をとるべきかを討議しました。

世界諸国民の根強く、そしてたえまない圧力の結果、原水爆禁止問題は軍縮の問題とともに、世界各国の政府および国会で真剣に討議されるようになりました。こうしてすべての国民にとつて明るい見通しがひらけてきました。

しかし今日に到るもなお国連軍縮委員会は、軍縮と原水爆実験をふくむ核兵器に関するなんらの決議も行うにいたつておりません。そのため原水爆実験は、人類全体に、かかわる深刻な脅威にもかかわらず依然として続けられています。

私たちは世界のすべての国民、なかでもアジア十億の諸国民に訴え実験禁止の実現を直ちにかちとらなければなりません。

原子力の平和的利用は原水爆の禁止が実現してこそはじめて人類のしあわせに役立つことができます。このためには科学者と一般大衆の協力がいますぐ必要です。今日すばらしく発展しているわたしたちの原水爆禁止運動を更に前進させるためには人類の平和な未来をつくりあげたいという強いねがいをいだいている他のすべての諸団体と今までよりも一層固く団結して活動しなければなりません、

日本国民を一つにむすんだこの活動は、日本の中央、地方の公私諸団体に影響を与えているだけでなく、世界のすみずみに力強い影響を与えています。

わたくしたちの運動は被爆者の苦しみは今もなおつづいており、それは今後幾世代もつづきます。

広島と長崎の被爆者は世界中ではじめての原爆犠牲者です。

被爆者の救援は、国内的国際的救援活動を通して、また原水爆の禁止と国外軍事基地の撤廃に関する協定を結ぶ事によつてのみ成功でき、これこそが総ての人がのぞんでいるところです

すべての平和運動はこれらの目的をめざして急速に発展しています。日本では、原水爆基地を撤廃せよ！生活を破壊されている沖ナワの同胞を救え！という要求が力強く発展しています

この世界大会に参加してわたしたち代表は、この目的を貫徹するため、世界のすべての国民と協力して奮闘することをここに誓います。

一九五六年八月十一日　長崎において

第二回　原水爆禁止世界大会

青春のない人々
原爆は私だけで沢山だ

原爆をうたう

夏もマスク手のケロイドは隠し得ず
ケロイドの貌ちらり向け受験生
余命きく愛者に默し汗の医師
ひきつりし顔のケロイド化粧してかなしや少女は嫁ぎてゆきぬ
ケロイドの顔半分に残りいて人目避け暮す若き人妻
父を返せ母を返せと壊上に叫ぶ乙女のケロイド光る

【朝日新聞〃天声人語〃より】

八日朝服毒自殺した長崎原爆乙女の会員鈴田まさえさんの死について切々と被爆者の実相を述べて異例の一般報告を行つた。

本会議を一応中止し、会員長崎市の原爆の丘平和記念像前に集い、午前十時五十分からの長崎市主催の平和記念式に参列した午後二時より本会議を再会、各国のメッセージが朗読され、続いて評論家平野義太郎氏、総評議長藤田藤太郎氏、広島大教授赤滝市郎氏、ブルーム女史、ピカール教授らの原子力と平和問題について報告があつた。

この大会でもつとも注目をひたのは被爆者代表の意見発表で。

被爆当時長崎三菱製鋼で働いていた時、崩れかかつたハリの下敷きとなつて半身不随のまま寝たきりとなり、十一年もの長い間母親スガさんの愛情にすがつて生き抜いてき悲劇の原爆乙女、渡辺千恵子さん（二十五才）が出席、世界代表や二千を越える国内代表を前に切々と原爆の恐しさと、被爆者の苦しみを身を持つて訴え〃原爆許すまじ〃の響いを会場に巻き起した。

私は原爆「おとめの会」の渡辺千恵子と申します。

この大会は私にとりまして、皆さんにご挨拶するのによい機会だと思いまして、母の手をかり出席させて頂きました。

私のこのみじめな姿をみて下さい（涙声でつまる）私の口からいい（涙声でつまる）私の口から多く語らなくてもこの姿で原爆のおそろしさはおわかりのことと思います。

暖かから下は全然きかなくなつてしまいました。上半身だけで生きている私は、母なくしては生きてゆくことができません。

何でこんなに苦しまなければならないのか、私は何ど死のうと思つたかも知れません。

十年間、全くかえりみられなかつた私たち被爆者は、昨年の広島大会を機会にはじめて生きる希望がもてるようになりました これも皆さんたちと被爆者たちとしつかり手をにぎることができた事によるものと思います※

※恥をしのんで昨年「生きていてよかつた」に出演しましたがその時長崎が、原爆の廃墟の中から現在の姿に復興した姿をこの目でみることができました。

私は三菱工場で被爆しましたがその工場も復興しました。が、もう私の青春は帰つてきません それなのに工場の前には黒い煙が上り、戦争のあつた十一年前のことがおもい出されてなりませんでした。原爆は私たちだけで沢山です。

八月二日に私は、現在なお大学病院に入院中の被爆被害者の人々を見舞いました。

一人は白血病で手術をしましたが、腹がふくれ明日をもしれぬ状態でした。

その中から、早く原子病の薬がほしいといつておりました。

もう一人は、原子病のため職をなくし、どん底の生活にあります。二人の子供は、戦者の残飯を食べながら生きている状態であり、生活の保障を訴えています。

世界の皆さん、どうかみんなの力で原爆をやめさせて下さい。

私たちが、心から生きていてよかつたと思える日が一日も早くくることをお願いします。

村田よし子（広島被爆者代表）

昨年広島で開かれた八六大会がみなさんの御協力と御援助のもとに成功させていただいたことを感謝します。私は女学校一年の時、爆心地より千五百米の所で作業に従事していて被爆しました。学問の自由を奪われ、勤労奉仕にかりたてられた私たちに与えられたものが、この無惨な姿だつたのです。本当にこの十年間、生きることは苦しゆうございました。何度自分で生命を絶とうとしたことでしようかしかし、その都度肉親や友人の激励をうけ、どうにか生きてきました。そうした私を救つて下さつたのが昨年の広島の八・六大会でした。私は失つていた勇気が回復できました。しかし、今日の朝刊に私たちと仲のよい山口仙治君の恋人鈴田さんが、結ばれることができず生命を絶つたと報道されました。

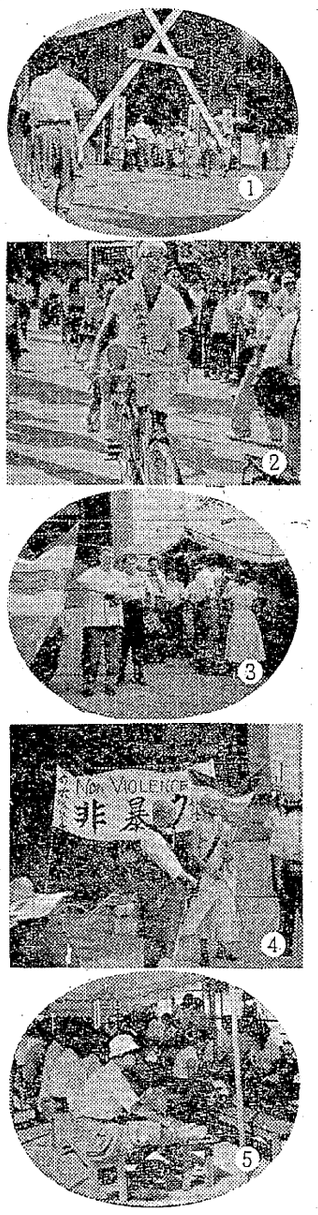
また私たちがこの大会に出席している間に、広島の被爆者がまた今日も一人亡くなられました十年たつても私たちの生命は脅されているのです。私たちはこの運動に生命をかけています。

私たちが生きなければだれがこの運動の先頭にたてるでしよう私は生命をこの運動に捧げたいと決意しました。みなさんがたももつともつと強い力をかして私たちを支えて下さい。

などの当時の生々しい実相や、この十年間の苦しみが切々と訴えられた。

この代表の意見はきく人の胸の奥底まで鋭くつきさり、今さらながら原爆の恐しさを身に感じた。

全人類幸福のため
本会議スナツプ



大会議場は長崎市東高校の体育館で開かれ、門前には世界大会のアツピールが目立つ。

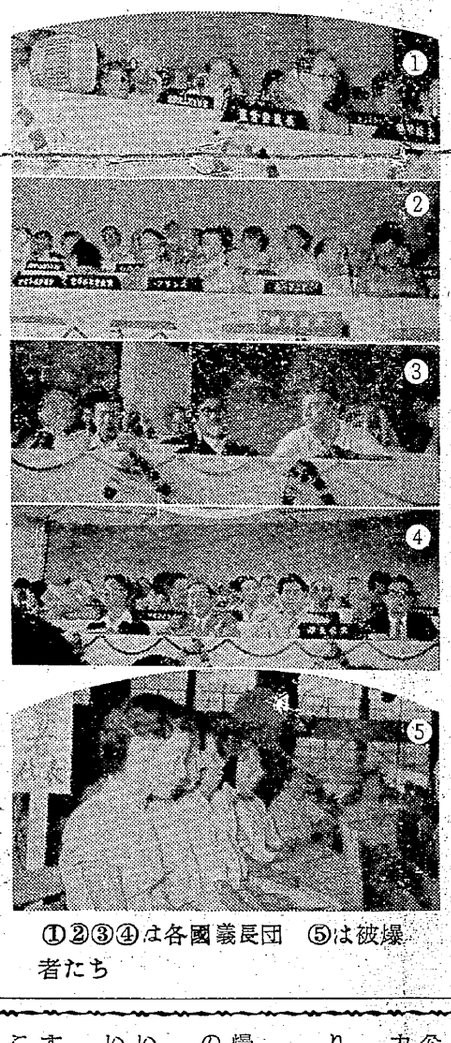
遠く兵庫県よりわれらの同志が原水爆禁止のため、自転車で会場にかけつける。

会場の受付はさながら人種の展覧会である。これが原水爆禁止の原動力となれ！

力強く宗教団体は〃非暴力〃の旗を掲げ、大会でアツピールを行つた。

あふれる場外でオブザーバー団は熱心にスピーカーにきいている。

大会議長団



①②③④は各國議長団　⑤は被爆者たち